

友の会 通信

2005.10
No. 75

ASSOCIATES NEWS

THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

風塵往来 3

一〇〇五年八月一五日、韓国の光復節（解放記念日）の日にソウルで国立古宮博物館の開館が披露された。北京・台北の故宮博物院とは異なり、あえて「古宮」と称せられたのは後者が宮廷コレクション対象であるのに対し、前者は朝鮮時代の王宮関連遺物を対象としているからであるという。景福宮内の前国立中央博物館がリフォームされ、誕生したものである。

開館記念の特別展として、朝鮮時代中期の白磁大壺（いわゆる「満月壺」）展が開催され、話題を呼んだ。韓国文化財庁の俞弘濬（ヨン・ホン・ジュン）長官みずから采配（さいばい）を振った企画である。高さ四五センチ以上の丸壺が、韓国から七点、日本・英国からそれぞれ一点ずつを独立ケースに納めた見応えのある展示となつた。それこれに魅力はあるが、釉色の点では「志賀さんの壺」が一頭抜きんじて見えた。

八月一六日には記念講演会が開催された。韓国からは元国立中央博物館長の鄭良謨（チョン・ヤンモ）氏による「一八世紀前半の白磁大壺」、日本からは私による「朝鮮時代中期の白磁大壺—その美学」、米国からは前クリーブランド美術館キュレーターのM・カニンガム氏による「満月壺—その考察と問題点」で、この順序でそれぞれの立場から白磁大壺を論じた。鄭氏は、広州官窯の窯址出土例を通じて、満月壺が一八世紀前半の初めのごく短時間に作られたことを主張した。カニンガム氏はアメリカにおける韓国美術に対する関心が一九〇〇年～一九三〇年代に集中していたことを論じ、あわせて満月壺が積極的に取り上げられなかった謎について触れた。私の講演は鎌倉末の歌謡集『梁塵秘抄』がなぜ古典として成立しうるかを論じた加藤周二氏の論考を引用し、それを白磁大壺の美学的分析に応用したものであった。

いずれにせよ、満月壺は民族の心のかたちとして、韓国ではひろくよく愛好されている。翻つて日本の心のかたちとは何であろうか。いろいろさまざま思い浮かぶが、ある雑誌の「百人一首ジャバネスク」というアンケートに応えたある植物学者の言葉が、それを言い盡しているようである。「何でも一つだけ挙げて語れないのが日本だね。」

(館長 伊藤郁太郎)

展示室から

テーマ展
朝鮮時代の白磁—素のうつわの美—

朝鮮時代（1392～1910）では、全期間にわたって純白の白磁がつくられました。同じアジアでも明清代には五彩、江戸時代にも伊万里などの華やかな磁器が好まれたことを思うと、きわめて特異です。朝鮮白磁はシンプルではありますが、力強さ、繊細さ、華麗さなど、じつに変幻自在な姿を見せてくれます。今回の展示では、官窯の製品を中心にその姿をご鑑賞いただき、また解説によりその使用方法にも触れます。

なお新館ロビーでは、朝鮮白磁をテーマとした現代韓国美術を代表する朴英淑（パク・ヨンス）氏の白磁壺、具本昌（クボン・チャン）氏による写真作品を展示しますので、あわせてお楽しみください。

写真上
白磁角瓶
朝鮮時代・17世紀末～18世紀
H:21.3cm Acc.No.20652 (住友グループ寄贈)



編集後記

あれほど暑かった夏も終わり、秋の気配が色濃くなつてきました。各地で様々な特別展が催される時期になり、当館では朝鮮時代の白磁と濱田庄司の展示を開催します。今年はどんな展覧会をご覧にいかれますか。（S.S.）

2006年のカレンダーをこれまでと違ったものを考えています。環境に優しいものにしたいと、従来使っていた

塩ビのケースを廃止し、金具を使用しない壁掛けタイプのものとしました。山紫水明の日本はもとより、この地球の美しさがいつまでも続くようにと願っています。（S.S.）

ボランティアの窓
存続問題に懸かる芦屋市立美術博物館で、久しぶりに公募展がありました。現代アートをしている友人が応募し入選しましたので、観に行ってきましたが、人影もまばらで賑わいも無く寂しい限りです。建物を使ったインスタレーションや芦屋ならではのアートもありました。現代芸術の先端の芦屋にあって、陽光をふんだんに取り入れ吹き抜けもゆったりした美術博物館。何故こうなった

のか、何か手伝える事は無いのか、松並木を歩きながら帰途につきました。（M.K.）

大阪市立東洋陶磁美術館
友の会通信 通巻第75号
2005年10月1日発行 No.21-3(年4回)

編集・発行:大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
http://www.moco.or.jp
デザイン:清嶋滋+studioTWEN 印刷:岡村印刷工業株式会社

秋季展示のおしらせ

9月13日(火)～12月25日(日)

◆ テーマ展

朝鮮時代の白磁—素のうつわの美—

◆ 特集展

堀尾幹雄コレクション 濱田庄司の陶芸—手仕事の技と美

◆ 常設展

東洋陶磁の展開

(安宅コレクション中国・韓国陶磁、日本陶磁、

李秉昌コレクション韓国陶磁)

◆ 休館日:月曜日(10/10をのぞく)、10月11日(火)、

11月4日(金)、24日(木)、12月24日(土)

<展示替期間・年末年始> 12月26日(月)～平成18年1月4日(水)

開館時間:午前9時30分～午後5時(入館は閉館の30分前まで)



白磁壺（志賀直哉旧蔵）
朝鮮時代・17世紀末～18世紀初
H:45.0cm Acc.No.21519(新藤晋海氏寄贈)



Fig.1
『フローラ・ダニカ』1761—1883年出版
ロイヤル・コペンハーゲン美術館蔵



Fig.2
『フローラ・ダニカ 蓋付深鉢、受皿』
1790—1803年 デンマーク王室（クリスチャンスボーグ宮殿・王室銀器室）蔵



Fig.3
『ブルー・フルーテッド デザート皿』1780年頃
ロイヤル・コペンハーゲン美術館蔵

今日はデンマークの歴史に触れながら、西洋陶磁におけるロイヤル・コペンハーゲンの位置付けについて〈フローラ・ダニカ〉とアーノルト・クローを中心にお話ししたいと思います。

イギリスの東インド会社が1600年に、ついで1602年にオランダの東インド会社が、そして1614年にデンマークでも東インド会社が設立され、インドや中国との交易が行われるようになりました。デンマーク東インド会社は1618年にインドに向けて出航し順調な滑り出しをしましたが、1625年にデンマークは三十年戦争に参戦したため一時中止されます。その後デンマーク東インド会社が再開し、1674年に再開後の第一便がデンマークを出航します。南回りで2年間かけて中国の福州に到達し、1677年には帰国しています。このデンマーク東インド会社の活躍がデンマークにおける東洋趣味、シノワズリーに大きな影響を及ぼしていると思われます。

1711年にフランス人のイエズス会宣教師ダントルコールが、景德镇へ行き、磁器製造の方法を書簡として本国に送り『中国陶瓷見聞録』にまとめられています。この頃、中国磁器がヨーロッパに大量に輸入され、1705年にはザクセンのアウグスト強王がヨハン・フリードリッヒ・ベトガー（1682-1719）に磁器の製作を命じ、1709年にはベトガーによって中国の宜興窯を寫した褐色の炻器が作られ、マイセンで1717年には青花ができていました。ベトガーとエーレンフリート・ヴァルター・フォン・チルンハウス伯爵（1651-1708）が盛んに磁器の製作を試みているのと同じ頃に、ヨーロッパから中国に渡った宣教師が本場の景德镇で磁器製造を調べるということをしていたのです。1718年にはウィーンでもデュ・パキエーが磁器工場を始め、ヨーロッパ各地でやきものが作られるようになりましたが、その頃デンマークは1720年まで北方戦争をしていたため、陶磁器の製作が行われるのはもう少し後になります。北方戦争後の1732年には、デンマーク・アジアテック会社が設立され、1843年まで恒常に中国と貿易をしています。

1753年にドイツ人医師兼植物学者のゲオルグ・クリスティアン・エーデルの進言を得て、植物図譜『フローラ・ダニカ』（デンマークの花の意味）（Fig.1）の編集をフレデリック5世が承認しています。既に隣国のスウェーデンでは1745年に植物学の体系を作ったカール・リンネによって『スウェーデン植物誌』が刊行されていました。同じスカンジナビアの国ですが、デンマークとスウェーデンはライバル関係にあり、この『スウェーデン植物誌』に対抗して、デンマークも『フローラ・ダニカ』という植物図譜を刊行したのですが、リンネが体系的に著した『スウェーデン植物誌』とは違って『フローラ・ダニカ』は網羅的ではなく、体系的ではありませんでした。

この頃白い磁器は「白金」と称されるほど、金に相当する非常に貴重なものとなっていました。磁器を生産することは高度の科学技術力の誇示として国威発揚にもつながるため、ヨーロッパ各地の国王は競って磁器工場を作り始めています。1750年頃は絶対王政の元にロココ様式が全盛期を迎えており、1769年にフランスで硬質磁器の製造が始まったことにより、ロココ風の華やかな色彩の食器が盛んに作られるようになります。デンマークでは1771年に科学者のフランツ・ハインリッヒ・ミューラーによって磁器製造の試作が行われ、翌年にはユリアネ・マリエ皇太后に、試作の成功を報告するとともに磁器工場建設の資金援助を請うています。また1773年には、デンマークの共同統治下にあったノルウェーでコバルトが発見され、これによってデンマーク領土内でカオリンとコバルトが確保されることとなり、産業として成立する可能性がでてきました。1774年に磁器製作所設立の趣意書が作られ、翌1775年にデンマーク磁器製作所の設立の許可があり、王室が資金の半分を出資した株式会社がつくられました。このときに今まで使われている、後のロイヤル・コペンハーゲンのトレードマークとなる3つの波線をユリアネ・マリエ皇太后が考案され、製品には絵付け職人を示す記号と3つの波線が描かれるようになります。コバルト工場もノルウェーに作られ、1779年にはクリスチャン7世が株を全部取得して名実ともに王立となり、ロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所となりました。しかし、王立とっても、隣国のマイセンの良質で安価な製品に太刀打ちできず、輸出産業として成立することはありませんでした。

1790年にディナーセットの〈フローラ・ダニカ〉（Fig.2）の生産を始めます。この絵付をおこなったヨハン・クリストフ・バイアー（1738-1812）はドイツのニュールンベルクに生まれ、1768年に植物図譜『フローラ・ダニカ』の銅版画の原画を描くためにデンマークに招聘され、その後磁器製作所に移籍しました。1790年から1802年にかけて、一人で1290種類の植物を1803点の食器に写し、最初の2年間で過半数の制作を行いましたが、晩年はほとんど失明状態で制作できなくなつたといわれています。フランスやロシアでもこのような植物を写した食器は作られましたが、これほど大規模で網羅的な植物図譜または食器は無く傑出したものでしたので、〈フローラ・ダニカ〉は「奇跡的なディナーセット」と称されました。現在、1530点の作品が残されています。〈フローラ・ダニカ〉を考案したのは内閣秘書官兼王立植物園の園長で、後にロイヤル・コペンハーゲン製作所の総監督だったテオドール・ホルムスコルドと思われます。通説では当時敵対していたスウェーデンに対し、その隣にあったロシアと友好関係を持つためにエカチェリーナ2世への贈答品として作られたのではないかといわれています。しかし、エカチェリーナ2世が1796年に没してからも制作は続き、亡くなった翌年には80セットの注文を100セットに増やしていますので、エカチェリーナ2世への贈答品だったかどうかはわかりません。

初めて〈フローラ・ダニカ〉が使用されたのは、1803年1月29日にメリエンボー宮殿で行われたクリスチャン7世の誕生日の晩餐会でした。当時、ナポレオン戦争が1799年から1815年まで行われ、1801年にコペンハーゲン沖でデンマーク海軍がイギリス海軍に敗北しました。敗北したにもかかわらずデンマークは国威発揚ということもあり、依然〈フ

ローラ・ダニカ〉の制作を続けましたが、翌1802年に制作を中止します。その後1807年にはヨーロッパで一般市民が砲撃を浴びた最初の出来事とされるイギリス軍のコペンハーゲン爆撃が行われました。この時ロイヤル・コペンハーゲンの磁器工場も爆撃されて壊滅的な被害を蒙っています。しかし、この敗北はデンマーク国民の結束を固め、1807年に1650年から続く王立宝物庫を前身とするデンマーク国立博物館が設立されました。博物館としては非常に長い伝統をもつこの館では、バイキング時代のものが展示されていますが、紀元前1400年頃の青銅器やデンマーク東印度会社関連のものなども展示されています。

19世紀初期はロココから新古典主義への過渡期でした。復活したロイヤル・コペンハーゲンも、19世紀の前半には新古典主義の作品を多く生み出しますが、1848年にフランスの2月革命がおこると、それに連動するように1860年にフレデリック3世が敷いたデンマークの絶対王政も崩壊し、1849年には一般選挙権も認める進んだ自由主義憲法が発布されます。憲法の発布後、王家の独占運営を廢するため、名前の使用権を認めた上でロイヤル・コペンハーゲンを売却します。その後、フィリップ・シャウがロイヤル・コペンハーゲンの經營権を握り、活性化のためにアーノルト・クロー（1856-1931）（Fig.4）を芸術監督として雇います。アーノルト・クローが生れた19世紀後半は、日本では開国してヨーロッパに陶磁器などの工芸品を盛んに輸出していたときです。当時の日本の陶磁器はヨーロッパで大きな影響を及ぼし、ジャポニズムとして日本写しのものが非常に多く作られていました。1867年のパリ万国博覧会に初めて日本から薩摩藩と江戸幕府、鍋島佐賀藩が参加し、その後1873年のウィーン万国博覧会には明治政府が出品しています。アレンス商会や起立工商会社が設立され、また国策としてヨーロッパに工芸品を輸出していく時代が続きます。

ジャポニズムの以前にあったシノワズリーでは、やきものも随分作されました。例えば、ヘレンドやマイセンでもシノワズリーは行われていましたが、ちょうどロイヤル・コペンハーゲンが下火の頃にシノワズリーの熱狂的な最盛期は終わっていましたので、ロイヤル・コペンハーゲンでは作られませんでした。

1882年にロイヤル・コペンハーゲンを引き継いだシャウは、それ以前にアルミニアという大衆向けの陶磁製作所を設立しており、王侯貴族向けの陶磁の製作をしていたロイヤル・コペンハーゲンをアルミニアと一つの会社として経営し、その結果ロイヤル・コペンハーゲンは大発展します。フィリップ・シャウという経営者と1885年に彼が招いたアーノルト・クローという芸術監督の二人によって、現在のロイヤル・コペンハーゲンが作られたといつても過言ではないくらい素晴らしい復活ぶりを示します。

アーノルト・クローは1880年に美術アカデミーを卒業後、1859年に焼失したフレデリクスボー城の修復に携わりました。1885年に入社するとすぐに、彼はロイヤル・コペンハーゲン設立当時の1770年代から使われていた古いデザインのブルー・フルーテッド（Fig.3）を再び採用しました。当時、アールヌーヴォーの全盛期で、歴史主義に捉われない新デザイン、新芸術で新しい曲線が生み出されました。このアールヌーヴォーの趣味とブルー・フルーテッドの唐草模様の曲線と磁器自体の形が一致して、ブルー・フルーテッドが非常に多く作られました。続いてシャウは1886年に〈フローラ・ダニカ〉の倣製品を作り出し、これが好評を得ました。1888年に農業、工業、芸術を集めた博覧会であるスカンジナビア博覧会がコペンハーゲンで行われ、ここにブルー・フルーテッドのほかフローラ・ダニカなどの多くを出し、大変な好評を得ます。これに勢いをつけて1889年のパリ万博にアーノルト・クローは出品し、大賞を受賞しています。また、当時ガレやティファニーなどの工芸品と共にロイヤル・コペンハーゲンも富裕階層に受け入れられたため、1894年に工場を大量生産向けに改造します。また、そのほかに動物やフィギュア（Fig.5）のほか、多色の釉下彩、結晶釉のものなどを盛んに製作しています。

1902年にはシャウが引退し、クローも作品を作る意欲を失ったのか、1916年に引退します。それ以後、ロイヤル・コペンハーゲンでは多くの作家が様々な製品（Fig.6）を生み出しますが、アーノルト・クローの作品が基本的な製品となって今に引き継がれています。デンマークには画家が家具を作るという伝統があり、偉大な画家が家具を作ることは、むしろ誇るべきだという考えがあります。本来、建築家であったアーノルト・クローも芸術的な発想で陶磁器を作り出していたのではないかと思われます。

現在のロイヤル・コペンハーゲンは、ジョージ・ジャンセンなどの会社の多くを買収して、1997年にはロイヤル・スカンジナビアというグループ会社を作り、その出資者がカールスバーグというビール会社でした。その後2000年には株を別の投資会社に売り、今の経営者はアレックスという投資会社になっています。大量生産でありながら、手で描き、その絵付け師や製作年がはっきりわかるようになっていることなどブランド管理と品質管理がしっかりとおり、ブダペスト郊外にあるヘレンドと同じ方向性をもった陶磁器会社です。ロイヤル・コペンハーゲンはヨーロッパで最も成功している陶磁器会社と考えられましょう。

以後はスライドを使って説明が行われた。



Fig.4
『自画像』アーノルト・クロー 1890年
ロイヤル・コペンハーゲン美術館蔵



Fig.5
『白熊』カール・フレデリック・リースバーグ 1894年
ロイヤル・コペンハーゲン美術館蔵



Fig.6
『豆の上の姫様』ゲハード・ヘニング 1911年
ロイヤル・コペンハーゲン美術館蔵